

# 平成29年度 第3回子ども未来応援会議 議事録 【要約】

日時：平成30年2月1日（木）

13時30分～15時00分

場所：藤枝市役所西館3階特別会議室

主催：藤枝市教育委員会教育政策課

子ども未来応援会議は、「教育日本一のまち藤枝」を目指し、次世代を担う子どもたちを健やかに育成するための教育環境の充実を総合的に推進するために組織され、学識経験者や教員、保護者、関係団体など17名の委員で構成されています。

第3回目の会議では、教育振興行動計画（後期計画）の素案、また、次年度の教育重点施策について、多面的・包括的に意見・助言をいただきました。

発言者	発言内容等
委員長	<p>【委員長挨拶】</p> <p>教育の問題は毎日のように様々な場所で議論されている。全国の県立高校では、他県から学生を集める動きが出ているなど、いろいろなケースがオープンにされている。一方で、現場での教育の問題は、多岐に渡る。最近では、教員の働く時間の問題、教育の中身など様々な問題が挙げられる。</p> <p>現在、県から依頼されて、長泉町にあるファルマバレープロジェクトの理事長を務めている。長泉町は普段は聞いたことがない人が多い町であるが、最近認知度が上がっている。それは、出生率が日本で1番高く、人口流入も静岡県で1番高い。人口は約2万8千人であるが、税金の収入が多く国からの補助金なしでやっている。そこで出会う人に話を聞くと話題になるのが教育の問題であり、住んでいる人の教育への関心が非常に高い。また、長泉町の住人は豊かであり、おそらく藤枝市より平均所得が高いと思う。一世帯1千万円以上所得のある人が14%あり、これは東京の富裕層に住んでいる人と同じくらいの高さである。</p> <p>また、今大学入試も変わろうとしている。記憶していても、答えが解けてもダメである。自分の意見、創造力、判断力、コミュニケーション能力が重要になってきている。今までの偏差値教育が崩壊しつつあり、新しい教育が始まろうとしている。教育では、目先のことだけでなく長い目で考えないといけない。子どもが生まれてから社会に出るまでが20年であり、教育とは、1人育つのに20年はかかると言われている。現在、AIやIOTなどのテーマがあるが、これは20年前には考えられなかったものである。働き方、職業、求められる能力がすっかり20年前と変わった。また、20年後になくなる職業がオックスフォード大学で議論され、注目されているが、私たちが今行っている教育の議論は、20年後を考えて議論すべきテーマなのだと思う。本日は、未来の藤枝について、いろんな観点から積極的にご意見をいただきたい。</p>

事務局	<p><b>【教育部長挨拶】</b></p> <p>10月の第2回会議では、藤枝市教育振興行動計画（後期計画）について様々な立場からご意見をいただいたことに、お礼を申し上げます。</p> <p>教育振興行動計画（後期計画）については、先日パブリックコメントが終わり、それを踏まえた案をご説明できると思う。</p> <p>現在、次年度の予算編成が佳境を迎えている。予算の成立は2月の議会の承認を得てからになるが、来年度の教育予算の重点事業としては、学校のICT教育環境の一括整備、新学習指導要領に対応したALTの増員配置、特別支援教育のさらなる充実、また、新しい視点として教員の働き方改革への支援、これらを重点事業として来年度頑張っていく。</p> <p>本日の会議では、藤枝市教育振興行動計画（後期計画）の案について、また、平成30年度の教育施策の重点事業について皆様から様々な意見をいただきたい。</p>
委員長	<p>教育振興行動計画（後期計画）素案について、事務局より資料の説明をお願いしたい。</p>
事務局	<p>藤枝市教育振興行動計画後期計画の案について説明する。</p> <p>特に、今回は10月の2回目会議で示した計画案からの変更点、パブリックコメントの結果についての説明を中心に説明する。</p> <p>10月の2回目の会議では、24課室の149事業が組み込まれている。その後、庁内会議等で、5つの事業を追加し、最終的に24課室、154事業でパブリックコメントを実施した。</p> <p>追加事業の1つ目が14ページの交通安全対策室「小中学生に対する交通安全教育」。2つ目が、29ページの環境政策課「環境人材育成事業」、3つ目が消費生活センター「賢い消費者の卵育成事業」、4つ目がお茶のまち推進室「お茶の淹れ方教室」、5つ目が34ページの教育政策課「特別支援教育体制整備事業」である。</p> <p>いずれも事業の漏れがあった等の理由で、今回追加してパブリックコメントを行った。</p> <p>計画案の構成の部分での変更は、目次を追加したこと、1から4ページにわたって、行動計画の策定について計画の実施等、前期計画の実施結果を踏まえた内容など記述を追加した。55ページから61ページには、事業の一覧を掲載した。71ページから73ページまでは用語の解説を追加した。</p> <p><b>【策定経緯について】</b></p> <p>これまでの経緯については、7月に庁内関係各課に調査を行い、前期計画の事業や、新規事業等について検討を行った。それに基づき、新旧対照表及び後期計画のたたきを作成し、8月には子ども未来応援会議で案を提示した。その後、庁内で藤枝市教育振興行動計画策定委員会及び作業部会により意見を徴収し、反映した。</p> <p>11月に庁内会議である行政経営会議、市議会、教育委員会及び校長会に報告し、12月25日～1月24日まで1ヵ月間にわたり、市内交流センター等16箇所においてパブリックコメントを行った。</p>

	<p>今後、パブリックコメントによる意見を反映し修正したものを、本日の子ども未来応援会議、庁内策定委員会・作業部会、教育委員会、行政経営会議、市議会等で諮り、最終的に3月には、藤枝市教育振興行動計画（後期計画）を承認いただき策定する。</p> <p><b>【パブリックコメント意見について】</b> パブリックコメントの結果について、3名より3つの意見の提出があった。</p> <p><b>【意見1】</b> 1つ目は、2019年5月1日に元号改正が決定しているため、計画上の期日以降の「平成」表記は改めた方が良いという意見である。これについては、この計画に限らず、現在市で策定中の全計画に関わることであるため、庁内検討の上、統一した表記とする。</p> <p><b>【意見2】</b> 2つ目は、計画の位置付けに関して、上位計画である市総合計画の計画期間（～H32）や新学習指導要領の実施（H32～）と計画期間を合わせ、施策の整合性を図った方が、実行効果が高まるのではないかという意見であった。 これについては、市教育振興基本計画の計画期間（H25～H34）に従い、計画期間を定めているが、平成33年度からの次期市総合計画の策定と整合を図り、次期市教育振興計画の策定を前倒しすることを念頭に置き推進する。</p> <p><b>【意見3】</b> 3つ目は、多岐にわたる事業展開が計画されているが、教職員の多忙化が問題である中、荷重や負担が増えないか心配であるという意見であった。 教職員の働き方改革の視点からも施策・事業を実施するとともに、地域総ぐるみの教育環境づくりを目指し、教育に関して学校のみではなく、家庭・地域・学校、行政の役割分担を明確にし、各々が連携を深め、その役割を果たしていくため、教職員に対し過度の負担がかかることはないと考えている。</p>
<p>委員長</p>	<p>パブリックコメントについて説明があったが、意見があれば伺いたい。 ないようなら、議題2「次年度教育重点施策の展開」について事務局から、資料の説明をお願いしたい。</p>
<p>事務局</p>	<p><b>【次年度教育施策の展開について】</b> 30年度に向けての教育重点施策について説明する。 来年度も、基本理念や基本的な方針は、藤枝市教育基本計画に掲げているように、教育日本一を目指し、「笑顔あふれる教育」を基本理念とし、他市町のモデルとなるような「学びの環境モデルふじえだ」づくりを進めていく。  特に、平成30年度については、4つの重点項目、5つの重点施策を中心に推進する。 まず、1点目の「未来を切り拓く力を育む教育の推進」では、学校 ICT 環境整備事業、英語指導助手(ALT)の配置などを中心に、子どもたちの「情報活用能力」を育成するため</p>

	<p>に必要な学校ICTインフラの整備や、企業や大学と連携し、理科学、英語など、子どもたちが新たな分野に興味や関心を抱くことができる環境や機会を創出することで、社会を生き抜き、未来を切り拓く力を育む特色ある教育に取り組んでいく。</p> <p>2つ目は小中一貫教育の導入推進である。藤枝市小中一貫教育推進計画に基づき、専科教員等の配置や、今年度作成している小中一貫教育カリキュラムの実践などの授業の充実に加え、地域人材の有効活用による家庭・地域・学校が協働した、地域ぐるみで取り組む教育やコミュニティ・スクール化の推進など、市内中学校区毎に地域の特性を活かした小中一貫教育の導入を計画的に推進していきたいと考える。今年度は、瀬戸谷地区での小中一貫教育がスタートし、2月中に大洲中学校区においても協議会の立ち上げを予定している。来年度は、この2地区に加え、西益津中学校区、広幡中学校区、葉梨中学校区においても、協議会を立ち上げ、市全体の小中一貫教育の推進を図る。</p> <p>3つ目は、教員の働き方改革の支援である。一昨年から、県のモデル校の指定を受けて、各中学校でこの働き方改革の関係を研究している。教育委員会の中でも多忙化解消委員会の開催や、部活動指導員の配置等の事業を通じ、教員が授業に専念できる環境の整備と、教員自身の働き方の見直しの両面から業務改善を図ることで、教員が子どもと向き合える時間の確保と教育の質の向上につなげていく。</p> <p>最後は、特別に配慮の必要な子どもへのきめ細やかな対応の拡充である。各小中学校の特別支援教育に関する指導・助言や保護者に対する相談活動のさらなる充実のため、専門的な知識を有する特別支援教育アドバイザーを新たに配置するなど、増加傾向にある特別な支援を必要とする子どもが安心して学べる環境・体制を整えていく。</p>
委員長	説明のあった平成 30 年度の重点施策についてや、これからの藤枝市の教育についてご発言いただきたい。
団体代表	私たち団体では継続して事業を行うことはあまりないが、今年の7月を目標に、主にICT、IOT、ネットワーク環境と子どものかかわり方、今後それらとどううまくつきあっていくかということを中心に事業を考えている。PTAの方からは、ネットワーク環境から子どもを切り離したいという親からの意見もあるが、私たち団体としては、切り拓いていく立場でもあるため、それらを子どもに積極的に与え、反応を見て、正していきたいと思っている。
団体代表	昨日、地域の学校の評議委員会があり、小中一貫教育の現場を見せていただいた。あいさつ運動、ピア・サポート等、学校独自で工夫しながら一生懸命やっている姿を見て評議委員として安心した。学校アンケートについて、数字的には学校が楽しいと思う児童生徒が増えているが、数パーセントは楽しくないと感じている。学校が楽しくない、友達関係がうまくいってない、授業が面白くないなどの回答は共通した児童生徒なのかということ、また、友達がいないから学校が楽しくないのか、勉強についていけないから学校が楽しくないのか、そこは連鎖していて、切り離せないのではないかという。負の連鎖や子どもの貧困など様々な問題がある中で、その数%は家庭環境が一番大きく影響していると感じる。

<p>団体代表</p>	<p>ここ2年間で事業が確実に進んでいると感じている。最近、紙面やマスコミで、人生は100年という記事がある。定年が65歳になって、年金は70歳くらいからになる。老後をどう考えればいいのかなど、価値観、人生観を改めて見直さなければならない時代になっているのではないかと感じる。大学の受験が変わって、記憶して回答を求めず、どう感じるか、どう思考するかによって変わってきている。自分があることに接したときにどう解釈し、どう事業を展開していくかなど、教育そのものが考える力の柔軟性を子どもたちに投げかけなければならない時代になってきたと感じる。その先の未来で、子どもたちが自ら歩みだす一歩が変わってくる。プログラミングや英語など、広域なことを継続して行ってほしい。</p>
<p>学校関係者</p>	<p>平成30年度の重点項目ということで、4点あるが、学校現場としては大変ありがたい。ぜひ、現場も行政と一緒に深めていきたい。特にICTに関しては、7校が先行実施で整備され、支援員などの支援も充実していると感じる。ただ機械を与えられるだけではなく、業者が支援員として使い方を教えてくれるのは大変ありがたい。</p> <p>働き方改革については、昨日も委員会があったが、藤枝市内のモデル校の取組の説明等があった。教師は真面目なため、仕事量が変わらずに早く帰れと言われても困るのが正直な反応であり、例えば19時で必ず学校を閉めるということも、1つの学校だけで実施しようとしても、なかなかうまくいかない。しかし、市全体の取組として、働き方を見直すため、全体として空気が変わり、教師自身も自分の働き方を考えることができ、保護者の理解も得られる。</p> <p>また、教育の現場では、いろんな支援が必要な中で、様々な支援をしてもらえることも大変ありがたい。</p>
<p>住民代表</p>	<p>子どもの身体づくりで関わらせていただいている。親の立場として、家庭環境が子どもの生活や学習態度など学校での様子を大きく左右すると感じる。市がこのようなハイレベルな教育を展開していく上で、親の意識が高かったり、機会を与えたいと思えば活かされるが、関心がない、何をしたいかよく分からない親は、良くないことだけをきいて子どもにやらせないこともあるので、親の意識や教育がある程度レベルが上がっていかないといけない。子どもへの教育も大事だが、親への理解もあるとよいのではないかと感じる。</p> <p>1回目の会議でも話をさせてもらったが、運動不足や体をうまく使えていないから保健室に来るような子どもたちが減るような取組をして関わっていければと思う。体あつての活力だと思っているので、様々なことにチャレンジしたいと思える子どもが増えるように、体作りの面で頑張っていきたい。</p>
<p>学識経験者</p>	<p>ICT環境、ALTの配置に関しては、他市に先駆けて取り組んでいると感じる。特に、ALTや各種支援員の充実などマンパワーを学校に送り込んでくれるというのは、教員の働き方改革への支援につながる。</p> <p>最近では、人手不足もあり、レジの無人化が増えているように、今後、人間関係の希薄化はますます進んでいくと思う。体と心の健康があつて人は頑張れるので、対人関係が希薄になり、心の弱い子どもたちが増えていくのではないかと心配である。藤枝市は、目標3にピアサポートをはじめとして対人関係力の育成などに力を注いでいるが、先生方が働き方改革の中で余裕をもって子どもたちと接して、心の教育ができるような力をつけていくことが必要である。子どもたちが、学校の中で豊かな触れ合いや思いやり、何かを成し遂げていく経験の中で、心たくましく、優</p>

	しい子たちが育ってくれればと思う。藤枝市は、スーパーティーチャーや教師塾の取組の中で、先生の育成に力を入れているのではないかと考えている。
学校関係者	施策5の特別支援教育強化事業について、概要の中に、特別支援教育士等の資格を有する人材を配置するとある。特別支援教育士は発達障害の研究団体である日本LT学会による学会認定を得た専門家のことである。この資格を持っている人たちは、ウィスクやK-ABCといったつまずきのある子のアセスメントとプログラムを作るのが得意。特別支援教育士を雇用すると普通学級の中にいる不登校や発達障害の子どもたちへのアセスメントができる。また、医者や臨床心理士が出したデータを読むことも利点である。特別支援教育士を配置し、常駐するとあるが、藤枝市の教員を育成するのか、それとも新たに採用するのか教えていただきたい。
事務局	特別支援教育士という資格を持った方を新たに採用し、教育委員会に配置することを考えている。
学校関係者	県から指定を受けている交流籍の事業は、非常に順調であり、昨年度より交流する子どもの数が増えている。小学校では、藤枝市の36人の子どものうち18人が交流している。今までは母親が主導となっていたが、今年からは教員が中心となっていくことになった。熱心な先生は、事前指導の中で、自分のクラスで障害のことや、交流予定の子どものプロフィールを紹介するなど、真摯になって工夫している。昨年度16人、今年は18人で人数としては2人しか増えていないが、内容が濃いものとなっている。協力に感謝する。今後もよろしくお願ひしたい。
学識経験者	藤枝の教育が知られてきて全国的にも進んでいると思う。30年度の重点項目について、よくできていると思うが、先生の働き方、多忙化が問題になっていて、パブリックコメントや国会でも取り上げられている問題であるため、どう取り組むかが大切である。行動計画の中にも、教員自身の働き方、見直しの両面が書いてあるが、先生は一生懸命で自分から働き方を変えることはできないので、教育委員会が率先してやらなければならない。特に先生が一番忙しいのは土日の部活である。政府や県の取り組みの先を行くようなことをしてほしい。先生の多忙化を先生自身に任せるのではなく、市として取り組んでほしい。例えば、給食費など先生が本来やらなくてもいい雑多なことを先生は引き受けているので、しっかりと精査して先生が子どもと向き合うゆとりをもてるような働き方改革をしてほしい。
住民代表	藤枝市は教育日本一を掲げ取り組んでいるが、その中にすすんであいさつができるというものがあり、これは基本的なことである。私の地区では、小中学校があいさつ運動のモデル校となっていて、地元地域でもバックアップするというので取り組んでいる。1人が1日何人の人と挨拶できたかという具体的な数字を出しているが、最近はいいさつができる子どもが多いと感じる。小中学生は地域社会の一員であり、お互いが一緒に生活しているので、大人も一緒になってあいさつするのはルールとして、徹底するようにしている。特に、重点目標の中にある小中一貫教育については早くやらなければならない時期になっている。昨年準備会、今月から推進協議会を発足し、より具体的になった。地域の特性を生かして、地域ぐるみで家庭教育を支援することが重要である。 また、少子化が進んでおり、少子化はマイナスイメージが強いが、少数精鋭、すべ

	<p>ての子どもが落ちこぼれないように育てることができ、地域に対して誇り、愛着を持てるようにということでもあり、学校だけでなく地域ぐるみで行いたい。最近、地域の特性ということで、あいさつ運動を重点項目で行っているが、これは多くの意味でプラス効果があると思う。</p>
<p>学識経験者</p>	<p>幼児教育の視点から3点ほど話したい。</p> <p>1点目は、教育は子どもたちの未来を創る仕事だと感じる。狭いミクロの視点でなく広く様々な視点から考えていくことが大人に求められているということである。</p> <p>2点目は、メディアが子どもの発達にどう影響するのかというリスクを考えていかなければならないという点である。日本、アメリカの小児医師会では、子どもが長時間スマホ、タブレット等を使用することは、脳に大きな影響を与えているといわれている。睡眠や外遊びが少なくなり体が動かなくなる。また、人間としてのコミュニケーション能力を作るのは、生まれてから目と目が合って話をするところからであり、これがコミュニケーションの土台である。小学校に行き先生の話を集めて聞くことができる子どもを育てなければならない。乳幼児に、両親からしっかり顔を見て話してもらい、聞いてもらうことが必要である。現在、0歳児の20パーセント、3歳～5歳の30パーセントが毎日スマホに触れるという統計が出ている。また、スマホ、タブレット上のアプリで怖い鬼を表示させ、それを子どもに見せて言うことをきかせるというものがあるが、日本の小児医師会の代表が講演の中で、子どもがこれを見たらPTSD（心的外傷）になると警告した。秋田のなまはげは、同じ鬼で子どもを連れて行こうとするが、周りにそれを阻止する、守る大人がいる。鬼のアプリの場合は、子どもを守るべき存在である親がこれを行うことから、子どもは、自分は守ってもらえないという感覚が傷になる。また、研究の中で、勉強もやらないが、スマホ、LINEを含むインターネットもやらない子の方が、勉強2時間、電子機器4時間やっている子と比べ、成績が高いという統計が多く出ている。やはり電子機器の使用は全部含めて2時間、9時までに寝るという約束、ルールを親子で作っていかないといけない。ブルーライトという光は、目の奥に入って脳の奥で拡散するため、脳が興奮する。テレビ、ビデオは寝る1時間前に切らなければならないと言われていたが、スマホやタブレットの場合はもっと前に切らなければ脳が興奮して寝られないという。便利さを捨てることはできない世の中であるが、それらが乳幼児も含めた学童期の子どもの発達、生活リズムや体、心の問題も含めて、どう関わるのか考えなければならない。積極的に受け入れていくことは大事だが、リスクを考えることも未来を考える上では大事である。</p> <p>3点目は、今年4月から幼稚園教育要領、保育所保育指針、この後小学校教育要領が変わってくるが、この中で、0歳児から教育が始まるといわれている。小学校へ行き、幼稚園が学校教育ではないということではない。泣くことから始まる自己肯定感の育ち、泣いてあやしてもらえず、スマホがくるという時代の中で、教育は社会的に依拠されるところが大きい。乳幼児期に、遊びなど五感を使う教育が大切である。五感、つまり非認知能力の育成が学童期につながっていく。学校教育の前倒しではなく、家庭教育、幼稚園保育園の中で、子どもと共感的に向かい合うことが大事である。人間の特徴は、みんな違っている。自分で変わっていくという自己</p>

	<p>喪失。人の中でしか人間になれない。この3つの特徴から言っても、乳幼児期に機械ではなく体を使って元気よく走りまわる、このような力がとても大事である。例として、小学校で図形を学ぶが、この土台は乳幼児期に母親と一緒に洗濯物をたたむことや、おやつを人数で分けるという経験であり、これらが非認知能力を作っている。今回の計画の中では全体的に小学校からの教育が多く、幼児教育についてはあまり詳しく書いてないが、幼児教育は経験や体を使って事実を通して知っていくという認知のスタイルであるということを知って、このような計画づくりに活かしていければよいと思う。計画の中の幼児教育の充実「体力向上の推進」の施策の中にムーブメント活動が挙げられている。ムーブメント活動というのは、療育という活動の中で生まれた1つの教育である。このような1つのことだけをやるだけでなく、様々な日常にある体を使う活動、遊びの中での学びを大切にしてほしい。</p>
委員長	<p>アメリカでは今や、恐ろしいのは麻薬ではなく、スマホだと言われているほど、スマホのマイナスの影響について考えられている。スマホのもたらすマイナス面について考えないと社会が崩壊すると言われているため、藤枝市としても考えていく必要があると思う。</p> <p>また、先ほど藤枝が最先端であってほしいという話もあったが、ぜひ藤枝が未来の教育の新しいモデルを提案してほしいと思う。例えば、将来何になりたいのか、どんな人間になりたいのかなどを考える人生教育や、どのように老後のお金を作るかなどの金銭教育なども藤枝市でできればよいのではないかな。</p>
団体代表	<p>会社経営を行っているが、人手不足が深刻である。先ほどの意見の中でもあったが、マンパワーが足りなくなる中で、なんとか維持していけるようにしていかなければ日本自体が消えてしまうと感じる。教育の中でも、人手不足に対して、将来設計や自分が住む町、国を保つことを考えることが大切であると思う。</p> <p>また、金銭感覚の話題があったが、何でも簡単に手に入る世の中で、子どもたちに、ものの値段や価値がわかるような金銭教育、経済教育などをしていかなければいけないと感じる。</p>
教育関係者	<p>キャリア教育や金銭教育は、小中学校の学校教育の中で行っている部分があり、消防士や警察官、医者などが実際に学校に訪れ、話を聞いたり質問をしたりする時間を設けている。そのような教育は子どもたちの生き方のモデルになり、刺激になるため、大切にしている時間である。また、施策の中にもあるが、「夢先生」という授業では、プロのスポーツ選手などが学校に来て、一緒に運動などをしながら、自分の人生の歩みなども含めた話をしてくれ、子どもたちは目を輝かせながら聞いている。学校の中の大人は、子どもにとってすべてモデルであり、声の掛け方1つでも大切である。勉強のできる子どもできない子ども、家庭環境が良い子ども良くない子ども、夢を持てるように現場としてがんばっていききたい。</p>
団体代表	<p>重要施策が4つ挙げられているが、どれ1つ欠けてもいけない、1つ1つが非常に大切であると感じた。</p>
学識経験者	<p>計画の中の目指す姿が少し抽象的であるため、もう少し明確であるとよい。また、これだけ多くの施策がある中で、どれも同じような力の入れ方では薄まってしまうため、藤枝の教育はどこが中心であるのか、メリハリがあればさらによいと感じる。</p>

委員長	藤枝の教育は何なのか、一言で言えるようなものがあれば、特徴がでて良いと思う。
学識経験者	子どもたちのことを、たくさんの大人が良くしようと思えることが土台であり、このような環境を大切にすることや、様々な意見を持つ人がいて、違った意見があつていいね、楽しいね、という多様性を認める教育が続いていけばよいと感じる。
事務局	3回の会議の中で、様々なご意見をいただいたことに感謝申し上げます。 本市において、学びの環境モデルを軸として、教育委員会だけでなく、全市を挙げて、施策展開を行っていきたいと考えている。今後、本計画は、3月を持って決定し、市民の方々に公表していく。平成30年度からは、この計画が推進されていくことになるため、引き続き、施策の検証やご助言をいただきたい。本日のご協議に感謝申し上げます。